

国指定史跡

古津八幡山遺跡 歴史の広場

弥生の丘展示館ガイドブック

No.3

(古墳・奈良・平安時代編)

このガイドブックの編集は公益財団法人弥生館の制作のもと
八幡山遺跡の発掘調査報告書に基づき調査を進められました。

弥生の丘展示館
ガイドブック No.3
(古墳・奈良・平安時代編)

【発行】
平成25(2013)年3月

【編集・発行】
新潟市文化財センター
〒950-1122 新潟市西区本場2745-1
TEL 025-378-0480 FAX 025-378-0484
Email bunkazai@city.niigata.jp

【印刷・製本】
株式会社 ハインクラフ
〒950-2022 新潟県新潟市西区小針1丁目11番6号
TEL 025-233-0321 FAX 025-233-0322

高地性集落の解体と古墳の出現

弥生時代終末期になると、古津八幡山遺跡の高地性集落は廃絶を迎えます。一方、麓の低地に舟戸遺跡が新たに出現します。この時期、越後平野の低地部では、新たに集落が出現したり、集落での遺物量が増加したりするなど、社会の大きな変化があったことが推測されます。古津八幡山古墳が築かれるのは、弥生時代の八幡山遺跡の廃絶が約150年後のことです。弥生時代の基に比べ規模が飛躍的に大きくなっています。舟戸遺跡からよく見える場所に築られました。

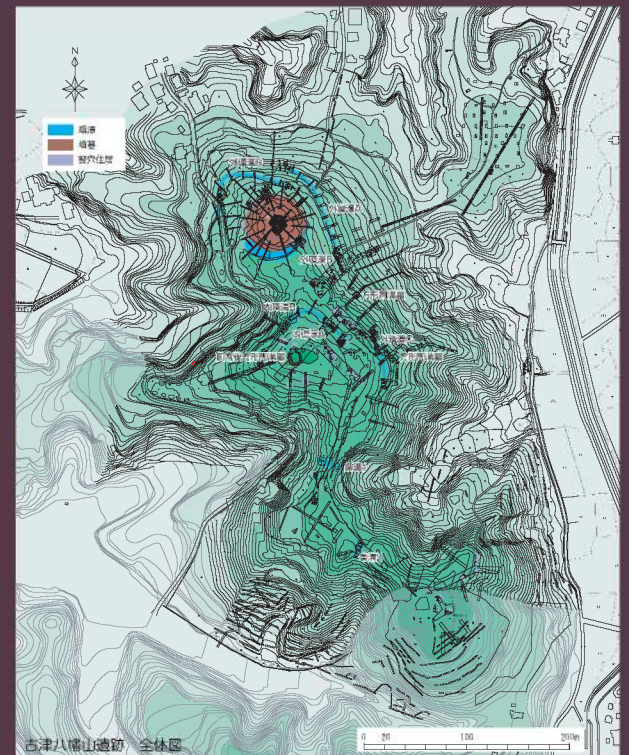
新潟市周辺の弥生時代・古墳時代遺跡分布図

- 弥生時代
- 弥生時代の遺跡
 - 方形周溝墓
 - 円形周溝墓
- 古墳時代
- 古墳時代の遺跡
 - 前方後円墳
 - 前方後方墳
 - 方墳
 - 円墳
 - 造出付円墳



古津八幡山古墳の調査の概要

古津八幡山古墳の高まりは、かつて中世の山城と考えられていました。この場所に総合運動公園の計画がもちあがり、1987年に事前の確認調査（第1次調査）を実施した結果、径65m以上の円墳の可能性が高いことがわかりました。なお、この調査で弥生時代の高地性集落の存在も明らかになりました。1991年には古津八幡山古墳測量調査団による測量調査が行われ、二段築成の造り出し円墳で、墳丘長80mもしくは63mと推定されました。その後、2000-2001年と古墳頂上にあつた大気観測所の撤去に伴う確認調査（第11次・第12次調査）が行われ、古代の遺構や遺物が確認されています。2011-2012年には史跡整備に伴う確認調査（第17次・第18次調査）が行われました。古墳の形や大きさ、埋葬施設の有無、築造方法の解明を主な目的とした調査で、古墳に焦点をあてた初の本格的な調査でした。調査の結果、直径60mの二段築成の円墳であることが確定しました。また、古墳の築造方法が明らかになるなど、多くの成果が得られました。



古津八幡山古墳の調査一覧

調査年	調査面積	調査種別
第1次調査 1987年	502㎡	確認調査
第11次調査 2000年	15㎡	確認調査
第12次調査 2001年	46㎡	確認調査
第17次調査 2011年	44㎡	確認調査
第18次調査 2012年	460㎡	確認調査

新潟県における主な古墳

山形県内での調査回数(右側は回数)

時期区分	時期	古墳集積層年	須恵器	阿賀北		信濃川左岸		信濃川右岸		魚野川流域		柏崎平野		越後平野		佐渡
				信濃川河口付近	角田山麓	舟倉山麓	新津丘陵	東山丘陵	東山丘陵(三条周辺)	魚野川	西部	東部	西部	東部		
前期	1期															
	2期															
	3期															
	4期															
中期	5期															
	6期															
	7期															
	8期															
後期	9期															
	10期															
飛鳥時代末期																



古津八幡山古墳 遺跡

【引用】1991年 (株)1081

※表中の時期や時期区分は、古墳の調査回数に基づいており、調査回数が多い順に示されています。調査回数が多い順に示されています。



大気観測所 (2001年撮影)



盛土断面 (第1次調査)



外空倉庫断面 (第1次調査)

蒲原の王墓—古津八幡山古墳—

古津八幡山古墳は直径60mの円墳で、新潟県最大の大きさです。古墳の多くの部分は土を盛ってつくられています。古墳の南西部に幅約8mの溝が掘られており、ここから出た土を古墳の盛土としておちに利用したと考えられます。

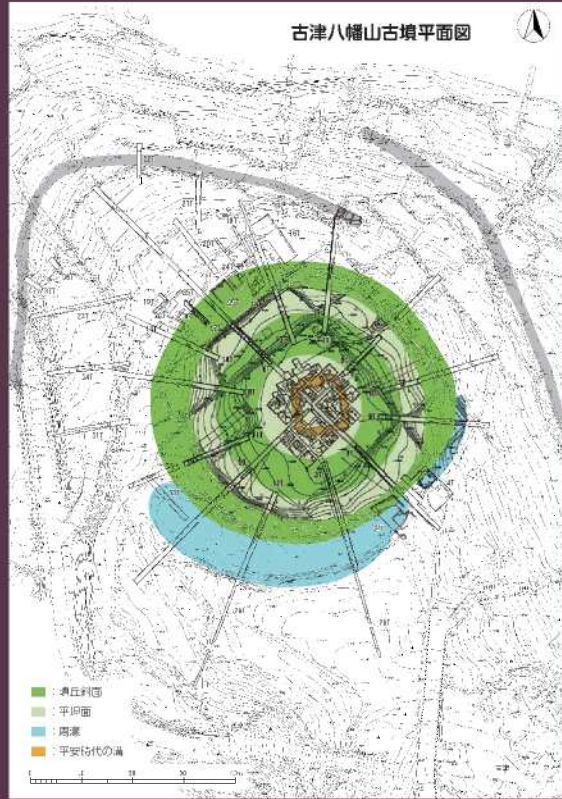
古津八幡山古墳をつくった人物がどのくらいの範囲を治めていたかは不明です。信濃川と阿賀野川にはさまれた交通の要所に位置していることから、東西・南北地域との交流などで越後平野をまだにかけて活躍した人物像が推測されます。



古津八幡山古墳測量図 (1991年)



古津八幡山古墳 上空から (1991年撮影)



墳丘斜面部 (第17次調査 10)



盛土断面 (第17次調査 6T)



確認調査 (第11次調査)



確認調査 (第12次調査)



墳丘斜面部 (第18次調査 24T)



周溝 (第17次調査)



周溝 (第17次調査 3T)



墳頂部 (第18次調査)



墳頂部 (第18次調査)



周溝 (第17次調査 12T)



周溝 (第18次調査 32T)



墳頂部盛土断面 (第18次調査)



墳頂部盛土断面 (第18次調査 1T)



周濠(第18次調査 32T)

古津八幡山古墳の造営

古津八幡山古墳では、厚いところで2m以上の盛土が行われていました。盛土の量は推計1,900m³です。これは10tダンプ300台以上の分量です。このうち、古墳の濠の掘削で得られる土量は約6割にすぎず、足りない分は濠の南西側の地表面を削るなどで補ったと考えられます。古墳づくりには延べ6,000人が関わったと計算できます。仮に1日に30人が参加したとして、半年以上かかる計算になります。



周濠(第17次調査 4T)

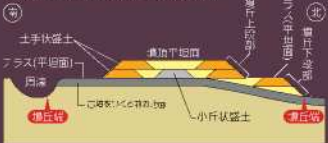


墳丘斜面部(第18次調査 12T)



周濠(第18次調査 33T)

古津八幡山古墳断面模式図



古津八幡山古墳のつくり方

設計図に従い、中心に杭を立ててひもを張りながら歩いて円を描きます。次に地形の低い北側を中心に盛土を行い、おおむねテラスの高さまで墳丘下段部をつくりあげます。続いて、古墳の中心部分に小丘状盛土を行うとともに、外縁では墳丘上段部の斜面にあわせて土手状盛土を行います。その後、小丘状盛土と土手状盛土の上面の高さを水平にします(工程面)。さらに、外縁に土手状盛土を行い、水平にしていく作業を繰り返すことで、墳丘を高くしていったことがわかりました。

特徴は、いわゆる東日本の工法(小丘状盛土)と西日本の工法(土手状盛土+工程面)の両方が確認できることです。このような東西技術の融合でつくられた古墳は、いずれも地域で核となるような在地の有力者クラスの古墳とみられ、ヤマト政権との密接な関係をもとに、技術者の派遣などの協力関係が構築されていた背景が推測されます。



墳丘部盛土断面(第18次調査)



土手状盛土断面(第17次調査 6T)



墳頂部小丘状盛土断面(第18次調査)



土手状盛土断面(第17次調査 6T)

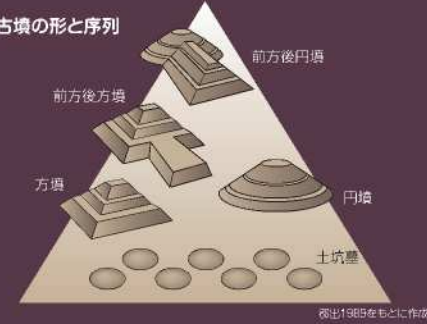


周濠(第17次調査 12T)

さまざまな古墳の形

古墳の形は自由に選択できたわけではなく、埋葬された人物の血縁関係などに基づいて決められた可能性が考えられています。新潟県の前期古墳では、古津八幡山古墳をはじめ、3番目に大きい城の山古墳、8番目の規模で墓石をもつ楕円八幡宮古墳など、縦横の上位に円墳が多い傾向にあります。鳥海宮古墳・保内三王山古墳群より北の古墳が円墳で占められる点も含め、これら円墳に葬られた人物像が注目されます。

古墳の形と序列



新潟県における前期古墳の大きさのランキング

順位	古墳名	形状	規模
1	古津八幡山古墳	円墳	60m
2	高瀬塚古墳	前方後円墳	54m
3	城の山古墳	円墳	42m
4	保内三王山古墳群 1号墳	前方後円墳	38m
5	山谷古墳	前方後方墳	37m
6	観音平古墳群 4号墳	前方後円墳	34m
7	吉井行塚古墳 1号墳	前方後円墳	32m
8	楕円八幡宮古墳	円墳	30m
9	観音平古墳群 1号墳	軌立貝形前方後円墳	27m
10	稲塚塚古墳	前方後円墳	26m
10	観音山古墳	円墳	26m
10	エゾ塚古墳群 1号墳	円墳	26m
13	大久保古墳群 1号墳	前方後方墳	25m
14	籠水口山古墳	円墳	24m
15	保内三王山古墳群 11号墳	遺出円墳	23m



観音山古墳(円墳)



楕円八幡宮古墳(円墳)の墓石



高瀬塚古墳(前方後円墳)



稲塚塚古墳(前方後円墳)



観音平古墳群4号墳(前方後円墳) (©高田教育文化協会・奥野)



山谷古墳(前方後方墳)



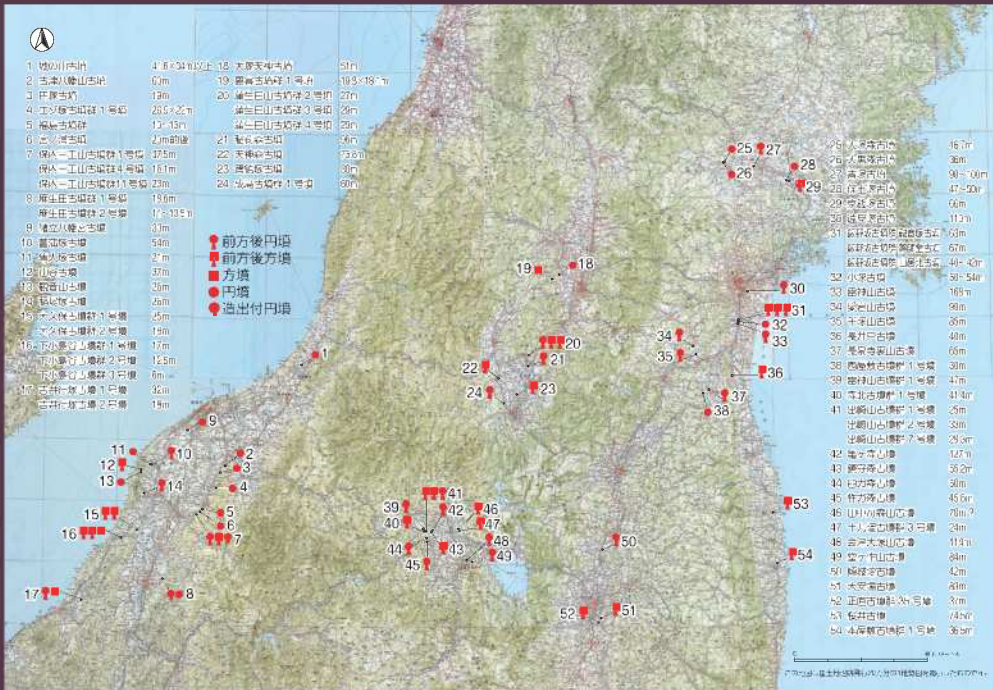
城の山古墳 仙台市教育委員会 提供

北限の主な古墳

古津八幡山古墳の位置する越後平野は、日本海側における前期古墳の分布の北限域となっています。古津八幡山古墳の北東約40kmに城の山古墳(胎内市)が存在しますが、その間には現状で古墳の空白域となっています。

前期古墳の分布の北限域は、内陸では山形県の山形盆地、太平洋側では宮城県の大崎平野となっています。両地域とも、越後平野と同様に比較的大規模の大きな円墳が存在する点は注目されます。

また、角田山麓にある山谷古墳と蒲湯塚古墳は、それぞれ日本海側沿岸部における前方後円墳・前方後方墳の分布の北限となっています。両古墳近くの集落(御井戸B遺跡・南赤坂遺跡)では、北海道に起源をもつ統縄文土器が出土しており、古墳時代の統縄文土器の南限域となっています。越後平野が北と南の文化が交りあう最前線として機能していたことがうかがえます。



仙台市史観委員会2000 辻2011 藤沢2000-2002 山形県立うさぎの里土器の丘考古資料館2011をもとに作成

豪族の屋敷(居館)一舟戸遺跡一

古墳時代、力のある首長は屋敷(居館)に住んでいて政治や経済活動をおこなっていました。一般的に居館は深で方形に囲まれ、濠の内部には柵や建物が整然と建てられています。

1993年に発掘調査が行われた舟戸遺跡では、古墳時代中期の1辺約7.5mと大形の竪穴住居や杭列(柵)などが見つかりました。大形の竪穴住居にはカマドがつくられていた可能性が高く、新潟県内でいち早くカマドを取り入れた先進的な集落であったと推測されます。遺物量も非常に多く、この遺跡が居館である可能性も考えられます。



舟戸遺跡 遠景



舟戸遺跡 竪穴住居

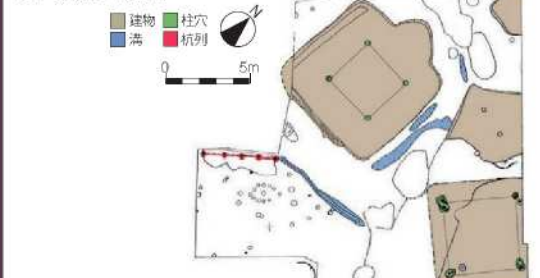


舟戸遺跡 遺物出土状況

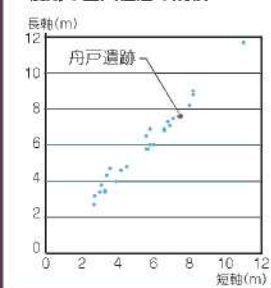


舟戸遺跡 杭列

舟戸遺跡の平面図



新潟県における古墳時代中・後期の竪穴住居の規模



新潟県教育委員会1996発表をもとに加工



舟戸遺跡 遺物出土状況



舟戸遺跡 遺物出土状況



舟戸遺跡 遺物出土状況



資料提供委員会2002 提供をもとに加工



御井戸B遺跡 遠景



南赤坂遺跡 遺物出土状況



御井戸B遺跡 統縄文土器



南赤坂遺跡 統縄文土器



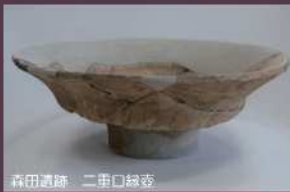
舟戸遺跡 土師器



この写真は1947年5月24日 米里撮影写真を複製したものです。

古津八幡山古墳周辺の集落

古津八幡山古墳周辺の古墳時代の遺跡については、これまでに古墳のある丘陵の北麓一帯で確認されています。古墳時代前期では森田遺跡があり、二重口縁蓋などが出土しています。古墳時代中期では舟戸遺跡・高矢C遺跡があります。舟戸遺跡は狭い調査面積にもかかわらず大量の遺物が出土しており、大規模な集落の存在が推測されます。古墳時代後期には塩辛遺跡があります。いずれの遺跡もその内容について不明点が多いですが、集落が継続して形成されていた様子がうかがえます。



森田遺跡 二重口縁蓋

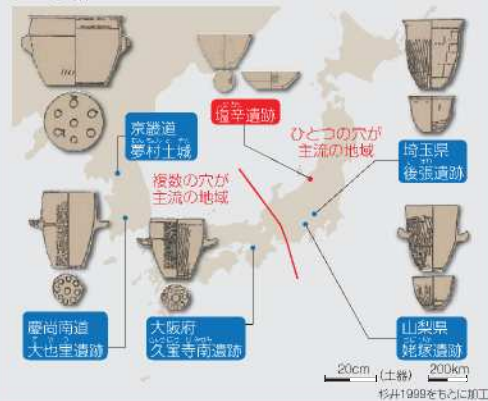


塩辛遺跡 土師器

米の調理法の変化



甌の地域性



米の食べ方

古墳時代中期・後期は、個人別の食器が普及したり、竪穴住居の調理施設が伊からカマドに変化するなど、食生活のかたちが大きく変わる時期です。また、米の調理方法も煮し器である甌が定着してきたことにより、それまでの水と米を一緒に入れて炊く(煮る)方法から蒸す方法が主流になったようです。塩辛遺跡の甌の底には、穴をひとつつけたものと、複数つけたものがあります。後者は西日本に多いタイプで、なぜ集落に存在したのか、その背景が注目されます。



塩辛遺跡 杯

塩辛遺跡 甌

塩辛遺跡 高杯

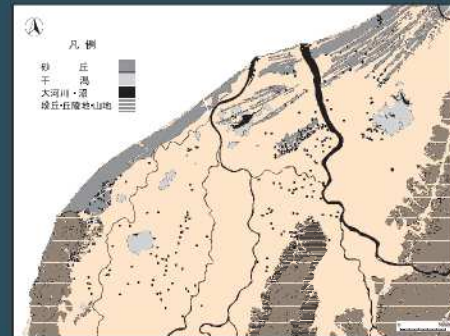
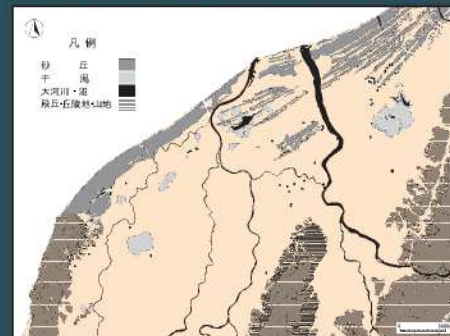
上からみた塩辛遺跡の甌

古代の新津丘陵周辺

越後平野における奈良・平安時代の遺跡は、主に平野部に立地する集落遺跡や、丘陵裾部に立地する製鉄遺跡、須臾器・土師器窯跡などの生産遺跡に分けられます。越後平野における沖積地の開発は古墳時代まで遅りますが、集落遺跡が本格的に増加し始めるのは奈良時代以降のことです。また、律令体制による官制的なあり方を示す遺跡が成立しはじめるのもこの頃です。奈良時代以降、郡ごとに須臾器窯や製鉄などの生産遺跡が認められるようになり、官による手工業生産体制も本格的に整備されはじめます。

蒲原郡において手工業生産の一大基地となったのが、古津八幡山遺跡のある新津丘陵及びその周辺でした。新津丘陵裾部では丘陵北東側に須臾器と土師器の窯跡が確認されており、新津丘陵窯群と呼称されています。須臾器の生産は7世紀後半からと考えられています。一方、丘陵北西側の金津地区では、製鉄炉と多数の木炭窯が確認されており、金津丘陵製鉄遺跡群と呼称されています。新津丘陵における製鉄(製鉄)は、相伴遺物や炉・木炭窯の形態・構造などから、8世紀から12世紀にかけて採業されていたと考えられます。

新潟市の遺跡分布図(上:古墳時代、下:古代)



飛鳥～平安時代の主要遺跡



五の図は、古墳時代と古代の越後平野における遺跡の分布を示したものです。古墳時代には丘陵裾や砂丘が居住の中心であったと考えられます。古代になると沖積地を中心に遺跡数が増える状況がうかがえ、水田をはじめとした土地利用が積極的に進められたものと考えられます。それには鉄製の農具が果たした役割も大きかったに違いありません。

古津八幡山古墳の墳頂部では、一辺約10m、幅約1.5～2.0m、深さ約0.4mの方形にめぐる溝が確認されています。出土遺物から平安時代(9世紀後半)のものと考えられます。この溝は、建物または塚に伴うものと推測され、新津丘陵の製鉄集団によるものと考えられます。



墳頂部(第18次調査)



墳頂部の古代の溝

新潟県内の製鉄関連遺跡(奈良時代・平安時代)



製鉄遺跡は郡単位に集中して分布しています。鍛冶遺跡は周辺集落に分布しています。

奈良時代・平安時代のものづくり

当時の新潟県は越後・佐渡の2国に分かれていました。越後国は石巻郡・沼垂郡・蒲原郡・古志郡・三島郡・魚沼郡・頸城郡の7郡、佐渡国は羽茂郡・雑太郡・加茂郡の3郡からなっていました。工具や農具などの材料になる鉄、そして食べ物を蓄えたり盛りつけたりする須恵器という焼き物は原則として郡内で生産し、使われていました。大規模な製鉄遺跡も当時の郡ごとに残っています。

新津丘陵は蒲原郡のものづくりの中心地でした。新津丘陵東側は須恵器・土師器という焼き物づくり、西側の金津丘陵では鉄づくりが行われていました。



古津八幡山遺跡 古代の土器

「金津」の地名の由来

古津八幡山遺跡のある丘陵南側の麓から新潟県立植物園にかけての南北450m・東西650mの範囲で、製鉄炉7基や木炭窯20基以上、鉄くす崩9.5などが見つかっています。これらは奈良時代から平安時代の遺跡です。製鉄遺跡のある場所は金属や鉄滓をしめす「金」や「かなくそ」という名称がついたものが多くあります。「金津」という地名は鎌倉時代の文献にもみられますが、この鉄づくり由来のものと考えられます。



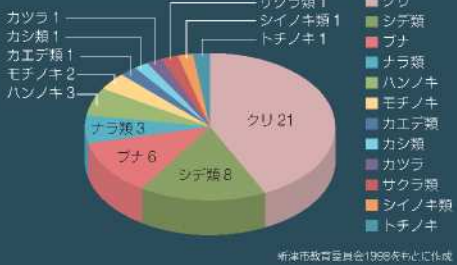
尾村遺跡E地点 全景



木炭からわかった奈良・平安時代の林の姿

木炭窯から見つかった木炭49点の木の種類を調べたところ、クリ43%・シデ類16%・ブナ12%・ナラ類6%・ハンノキ6%などとなっています。現在、クリ・ナラ類(コナラ・クスノキ)は多く見られますが、ブナは金津丘陵全体でも数本しか確認されていません。奈良時代以降の気象の変化によって衰退したと考えられています。

金津丘陵製鉄遺跡群から出土した炭化材の樹種



新潟市教育委員会1998年をもとに作成

「金」のつく製鉄遺跡



鈴木2008をもとに加工



尾村遺跡C地点 木炭

木炭の顕微鏡写真とブナの木



クリ(尾村遺跡E地点) ブナ(尾村遺跡C地点)



草水町二丁目遺跡 須恵器窯



草水町二丁目遺跡 土師器焼成窯

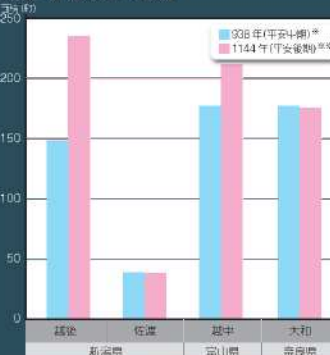


草水町二丁目遺跡 須恵器



大入遺跡C地点 製鉄炉

越後・佐渡の田の面積



水田の開発には、鉄斧で木を切り倒し、鋤や鍬で水路や水田を切り開きました。

※和名伊 新潟県農林事務所 及び1996年をもとに作成

必需品だった鉄の道具(鉄製品)

越後では奈良時代から平安時代にかけて集落が増え、9世紀後半に最も多くなります。また、10世紀中頃から12世紀中頃の約200年間に、水田の面積が約1.6倍にも増加しています。このような、新しい集落や水田の開発には、斧や鋤・鍬などの鉄の道具はなくてはならないものでした。もし、鉄の道具がなければ、このような開発は不可能だったのではないのでしょうか。鉄製品の材料をつくる製鉄基地は、重要な施設として役所が管理していました。



上浦B遺跡 鉄製鋤先



上浦B遺跡 碓石

平安時代の製鉄炉一壱形炉(大入遺跡C地点)

古津八幡山遺跡のある丘陵の南東の麓で見つかった大入遺跡C地点の製鉄炉です。今から約1100年前、9世紀後半の平安時代のもので、砂鉄を原料に木炭を燃料として用いた製鉄炉です。炉の背後にある踏みフイゴを用いて炉の中央にある突出部分(羽口)から送風されていました。もともとの炉の高さは1.5m程と推測されます。炉の高にできた鉄塊は前方を横して取り出しました。炉の周囲からは約1トンの鉄くすが出土しています。



大入遺跡C地点 全景



大入遺跡C地点 製鉄炉と踏みフイゴ

